

---

書 評

---

〈随想〉

宮本久雄著

『存在の季節——ハヤトロギア（ヘブライ的存在論）の誕生』

知泉書館，2002年

加藤信朗

本書は既刊の『福音書の言語空間』（岩波書店，1999年）、『他者の原トボス』（創文社，2000年）と共に著者の思索生命の基幹を作る三部作の一つをなしている。それは「ことば」に衝き動かされ、「ことば」を求め、「 pneuma（霊）」に導かれて歩み続けてきた一人の修道者の六十年を越える彷徨の歩みの赤裸々な記録であり、かつ、そこからすべての「他なるひと」、「友（＝共）なるひと」へと「〈いつくしみの〉共餐」を呼びかける「荒野に呼ばれるものの声」である。それが「ハーヤー（ある）」の呼びかけであり、「ダーバール（事・言）」として、いまでも、どこにあっても働く現勢であると著者は宣言する。

本書は、エジプトにあって苦しみ叫んでいる同胞を解き放せとモーセに呼びかけてきたものに対して、モーセがその名前を告げてくれと求めたとき、そのものが語りつけた（Exod. 3:14）「そのもの自身の名前」、「わたしはある（'ehyeh）」の在りかた、働き方の真義を説き明かそうとする。この名は、『七十人訳ギリシャ語聖書』では“Εγώ ειμι ὁ ὢν”と翻訳され、またラテン語で“Ego sum qui sum”と訳されて伝承された。この語はユダヤ共同体のなかで、またヘレニズム期以後、初代キリスト教・古代キリスト教共同体のなかでさまざまに扱われ解釈されてきた。しかし、ヘレニズム期の共同遺産となったアリストテレス著作集が継承される過程で、未完に残されていた「第一哲学（*ἡ πρώτη φιλοσοφία*）」に関わる一連の草稿群が『形而上学（*Metaphysica*）』という、あたかも完成された一つの著作として受容され、そこに「形而上学」と呼ばれる一つの学問領域が形成され、それに依拠して西ヨーロッパ中世以降の神学・形而上学の体系が形成されていったのは事実である。そこでは、この

呼び名はすべての「存在者」に「存在すること」を与える第一根拠としての神の「存在」の唯一独特な「ありかた」を表わすものとして解釈された。そこに形成された「形而上学的神論」を著者は「存在・神・論 (onto-theo-logia)」と呼び、それはモーセに告げられた本来の「ハーヤー」の働きを覆い隠し、固化した存在根拠の「自同性 (identité)」の空間を作りだし、「他者の他者性 (l'alterité d'autrui)」を排除する排他的な「自己同一性」の社会を作り、それが近代ヨーロッパ世界の「自同性社会」を形成し、「科学万能社会」を経て、ついには前世紀の「シヨアー」に終極したと著者は断ずる。

この極論とも見える著者の断定に対しては反論もありうと思うが、原初の「ハーヤー」のもつ「生動性」に現代人がいまだのようにして近づき、その生命をどのようにしてこの「世」にもたらしうるかを仔細に尋ねてゆく著者の生涯をかけた路程の記録は貴重であり、傾聴すべき多くの知見を含んでいる。

「ことば」の「生命」への論究から始まり、「砂漠への漂泊」を経て、「喜びの共餐」にまで説き及ぶ本書の詳細をここに摘要することはできない。しかし、筆者には、宮沢賢治がその最愛の妹トシとの別れの日を歌った詩「永訣の朝」を「序」に置き、安藤昌益の「米食」文化における「共食」の真義に言及して終える本書の全構想の内に、著者が本書でひとびとに伝えたいと願ったことのある中心があるように思えてならない。それは、「束の間」のこの生において、ひとがみずからにいちばん親しいひとと共同しうる喜び（そして悲しみ）が何でありうるかを、いまいちどひとに思いめぐらせてくれるからであり、また、「食事」を、友（=共）なる「ひと（=他者）」と共にすることを喜ぶことに「人間存立の基盤」があることにひとの目を向けさせてくれるからである。本書の始めと終りを結ぶこの筋に本書のすべての論稿は入ってくるように思える。またそこには、一人の修道者が「一人のひと」の足跡を探ね求めて辿り続けてきた生涯の路程の一こま一こまが埋め込まれている。それを著者はいま「ハーヤー」の贈り物として喜びのうちに享け、感謝の歌を歌っている。

劈頭の第一章「荒野に咲く物語——異化的真理の声と聴従的漂泊者の物語」で聞くオイディプス王と預言者ホセアの物語は、「わたしはある」がもつ「異他なるもの」へとみずからを開いてゆく「ハーヤー」の「ダーバル」の働きの実相を読者にはげしく突きつけてやまない。それは聞くに苦しく、見るも耐えない運命の物語であるが、著者はそこにこそ「ハーヤー」の声に突き動かされて「他者」に身を開いていった

「一人のひと」の生涯の「あるがまま」を重ね合わせているのではないだろうか。

モーセに告げられた神名「わたしはある」を言語論という切り口で考究しようとしたところに本書の劃期的な点があり、それが本書で展開される「ハヤトロギア」（ヘブライ的存在論）の場所を斬り拓いている。著者はこれを前世紀において「言語論」を新しい形で創出したソシュール、リクール、レヴィナスという三人の先達の偉業を独自の視点から簡潔に批判的に取り出すことにより、まったく新しい「ことば論」の場所を拓き、伝承の「存在・神・論」の固い殻を打ち砕いてみせる。

ソシュールの言語論の新鮮さは parole, langue, langage という言語を構成する三つのカテゴリーを明別することによって、人間社会、したがって人間そのものを構成するものとしての言語の生きた現実態を明示するところにあったといえるだろう。それは世界理解の基本を概念把握、概念体系の組織化によって行なってきた十九世紀までの哲学・神学的思弁を廃棄し、言語論から始まる「人間の自己理解、世界把握」の新しい切り口を斬りだすものであった。このことを著者はまことに鮮やかに説き示してくれる。しかし、それは、著者がこれら先達の業績を解説し紹介してくれるからではない。これが著者の最深の関心事である神名「わたしはある」の根源性への「参究」（この耳慣れない用語は本書で頻用される著者の「知慧の探究」を表わす用語である——おそらくは『正法眼蔵』によるか）の道にいかにか光を与えうるかという視点で三者の偉業を批判的に検討しているからである。

本書が紹介してくれるソシュールの「チェスの喩え」は本書全体の帰趨を語り明かしてくれる。チェスがペルシャからヨーロッパにもたらされることによって蒙る外的な変容はチェスの本質構造になんら変化をもたらさない。しかし、チェスの盤の縦筋、横筋の一つが加えられるにせよ、取り去られるにせよ、それはチェスの構造全体を変えてしまう。さらに駒の一つ「騎士」が取り去られて、別の機能の駒が組み入れられたとしたら、チェス全体が変わってしまう。

著者が本書で求めているのは、人間がその上に生きている“ことば”の組織を根源から揺り動かし、「新しい生命」の参究へとひとをいざなう「はじまりのないことば」を求める漂泊の旅へとひとを組み入れることである。いま、かりに「はじめにことばがあった」という文の順序を逆にして、「ことばがはじめである」と言い直すとしたらどうだろうか。本書はそこに拓かれてくる「はじまりのないはじめ」としての「こ

とば」への無私なる参究の道へとひとを招き入れる。

こうして、本書は己れを無化する“ことば”を探ねる漂泊の旅へとすべてのひとを誘（いざな）う貴重な書物となっている。

京都大学文学部に、わが国で初に開設された「キリスト教学講座」の教授として、かつて有賀鉄太郎博士が世界ではじめて拓いた「ハヤトロギア」の道（本書 287 頁参照）が、いま五十年を経て、宮本久雄氏により継承され、さらに新たな「探究の道」として検証され、展開されているのを見るのは喜ばしい。わが国における「哲学探究」において、先達が開いた道の意義をただしく見極め、これを継承してゆくことのあまりにもすくないのを思うにつけ、本書の意義は大きい。

いま、まさに「ハヤトロギアの季節」が到来しているのではなからうか。

---

Adam G. Cooper

*The Body in St. Maximus the Confessor:*

*Holy Flesh, Wholly Deified.*

Oxford, 2005, pp. xii+287.

谷 隆 一 郎

本書は、表題から見て取られる通り、証聖者マクシモス（580 頃-662）の哲学・神学の基本線を、とりわけ身体性（corporeality）という観点から明らかにしようとしたものである。著者については詳らかにしないが、本書は元来は A・ラウス指導のもとでダラム大学神学部に提出された博士論文をもとに記されたものである。著作の形態と筆致は型通りのもので、とくに興趣に富んでいるとまではゆかないが、本書は原典の重要な文脈を数多く訳出しつつ、けれんなき吟味と解釈を提示しており、マクシモス研究の一角を占める労作と見受けられる。

本書の章立ては五章に分かれたれ、それぞれ 1. 身体性と隠蔽, 2. 身体性と世界,